墨の彩り

墨画は単に白と黒の色のない世界ではなく、「墨に五彩あり」との言葉通り、古来より優れた画家は墨を用いて色や空気までも表した。近代においても、画家たちは古典に学んだ墨の表現により空気や光をいかに表現するかという大きなテーマに挑戦した。

43　唐崎老松図　野村文挙　一面

明治三十年（一八九七）頃　絹本墨画
五五・〇×一四三・〇

野村文挙（一八五四～一九一一）は、京都で塩川文麟、そして森寛斎に師事して円山四条派の画風を学んだ画家である。明治十三年（一八八〇）に京都府画学校に出仕し、同十九年に東京へ移住してからは、皇太子（大正天皇）ご在学の学習院で教鞭を執った。

文挙は、明治三十年（一八九七）の日本美術協会秋季美術展覧会に《唐崎夜雨図》という作品を出品しており、この絵は展覧会へ行啓された皇太子の御選定により御買上となった。本図がこの御用品にあたるかは不明だが、文挙は明治三十二年にも《近江八景図》と題した八幅の作品の中に、本図と近似した「唐崎夜雨」を描いていることから、おそらく明治三十年前後に「唐崎夜雨」を題材にした作品を複数描き、本図もその一つと考えられる。そもそも近江八景とは、瀟湘八景という中国洞庭湖を中心とする八つの景勝地を描く山水画の伝統的画題にちなんで、それを琵琶湖周辺の八景に置き換えたものである。歌川広重の浮世絵などにその例が認められる。雨にけぶる夜の琵琶湖畔を描いた「唐崎夜雨」は、画面中央に唐崎神社の巨大な老松がシルエットで浮かび上がるのが広重からの定型である。潤いのある画面は四条派の伝統であり、その系譜につらなる文挙は本図でもぼかしとにじみを駆使して墨一色で情緒ある雨の情景を描いた。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

古典再生——作家たちの挑戦

三の丸尚蔵館展覧会図録No. 72

編集　宮内庁三の丸尚蔵館

制作　株式会社 東京美術

翻訳　黒川廣子

発行　宮内庁

平成二十八年三月二十六日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan